

## 編集後記

まず、東京工芸大学芸術学部紀要『芸術世界』第15号に論文・作品をご投稿たまわりました先生方に、心よりお礼申し上げます。多様な分野からの、さまざまな個性と深みに満ちた内容に、編集者の一人として深い満足感を感じます。

さて、今回の表紙と「表紙のことば」は、写真学科を今春定年退職なさる池田陽子先生にお願いいたしました。素晴らしい作品をお寄せくださいました。写真の玉手御前とは、人形浄瑠璃「摂州合邦辻」に登場し、お家騒動の中、継子俊徳丸に道ならぬ恋をしかけるが、父合邦に刺されてのち、それが悪臣の毒手から俊徳丸を救う苦肉の策であったことを明かす悲しい人物です。憂いをこめながらも、涼やかで鋭い眼差しの中に、何かが深く感じられます。

人形は、人間の生活する地域には必ずといってよいほど存在するとされ、人間の姿・形を作り出そうとしなかった民族はいないといわれます。また、人形の作られる目的の一つに、呪詛つまり呪いがこめられる場合が多かったことも、よく指摘されています。歴史は人間関係の苦しみの累積であったのかも知れませんが、この玉手御前の美しい眼差しの中に呪詛の要素を読み取るのは、私だけではないと思います。

ところで、現代の日本ではこのような人間関係に苦しみ抜く人々が多くなったといわれます。特に若者の中に多いように私は感じております。無理をして人に話を合わせながらも、自分を理解してくれず、挙句の果てにはいじめようとする人々に呪いのようなものを感じると告げた学生の告白を、よく耳にしてきました。日本には、呪う相手をかたどったわら人形などに五寸釘をさすような風習がありましたが、心の中でそんな気持ちにとりつかれている若者も決して少なくはないようです。閉塞した日本社会の非常に重要な問題であると考えられますが、池田先生のお写真は、側面的にこのような問題も提起してくださっているように思われます。

いずれ「人間そのもの」の意味を、多方面からえぐっていくような企画が、本紀要でもなされることを期待したいと思います。

平成21年 3 月 紀要編集委員長 加 藤 智 見

## 芸術世界

東京工芸大学芸術学部紀要 Vol. 15

2009年 3 月31日 発行

編集 東京工芸大学芸術学部  
紀要編集委員会

発行 東京工芸大学芸術学部  
〒164-8678 東京都中野区本町2-9-5  
Tel. (03) 3372-1321  
Fax. (03) 3372-1330

印刷 有限会社 啓文堂 松本印刷  
東京都新宿区早稲田鶴巻町 565-12